

# 序

古代ギリシアの時代から、医療は3つの基本的道具を用いてきた。“薬(herb)”と“メス(knife)”と“言葉(word)”である。

薬が医療の中心的役割を果たしてきたことは論を俟たない。特に19世紀以降の近代科学の発展に伴って、それは多くの病気の治癒を可能にしてきた。あるいは、治癒とまではいかなくとも、病気を持ちながら生きていくことを可能にした。

薬がその効果を発揮するためには、その薬理学的特性はもちろんであるが、患者が正しく使用(服薬、注射)し続けることが必要である。ところが、このことは、当然守られねばならないこと-義務-として捉えられてきたようで、どうすれば正しく使用し続けることができるか、についてはあまり議論されてこなかった。

処方する側は、患者の病態に合わせて必要な薬剤を提供する。病気の軽快を望むのであれば、100%正しく使用するの当然であると考えている。しかし、実際はそうはなっていない。このことが注目されてきたのは、残薬の実態報告が相次いでなされ、社会的関心を持たれたことが一因である。

「使用しない薬がたくさん余っている」という事実は多くの問題を抱えている。本当に医学的に必要なのかという議論もあるだろう。必要だとして、なぜ余ってくるのか、なぜ正しく使用されないのか、その理由を知ることが必要である。処方される側に薬に対するどのような事情があるのかを知る、ということである。次に、いくつかの理由がわかったとして、それでは、どういう対策がとれるかということが重要である。いろいろなレベルでの工夫が考えられる。

本書は、薬が正しく使用されることに関するこのような問題点を、“アドヒアランス”という考え方に基づいて解説した書籍である。実際に処方する医師、および患者による使用実態を把握する薬剤師の方々にお書きいただいた。いくつかの主要な慢性疾患を選び、その領域の専門家であって、かつアドヒアランスに詳しい先生方をお願いした。

出来上がった原稿を読ませていただいて、私が長年強い関心を抱いてきたこの分野にとって新たな一歩となる書籍が出せることをうれしく思っている。本書が薬物の有効利用という問題について一石を投じ、広く医療者や行政の関心をよび、多くの議論がなされることを期待している。

“薬(herb)”を活かすのは医療者の思いやりのある“言葉(word)”だ、ということが本書から伝われば幸いである。

2017年7月

奈良県立医科大学糖尿病学講座教授

石井 均